

# 呼び掛けるもの、誘い出すもの

佐野 吉彦 (安井建築設計事務所取締役社長)

「未来のいえ」展(2013.6.22-7.28、西宮市大谷記念美術館)では、國府理さんによるたくさんの魅力的なのりものが、確かな光を放っていた。<私にとって「のりもの」とは(中略)ここではない何処かへ連れて行くことができる、その可能性こそが重要な機能だった>と作家自身が記しているように、その造形は、既存イメージを軽やかに飛び越えていた。

人は自らの能力と地平を広げるために機械を開発し、それによって社会のポテンシャルが高まった。そういう順序は正しいだろう。並行して、できあがった機械は、改修もしくは普及・量産を目的として、部品と手順の標準化へと進んでゆく。これも正当である。しかし、そして形成された社会システムが、人を過度に管理し、あるいは人を傷つけることもある。システムとして長く定着できるのは利点ではあるが、自由なイメージを羽ばたかせるステージには頭が後戻りしにくくなってくる。國府さんの表現行為は、そのような桎梏をしなやかに解き放ってみせている。機械がもたらす時代、のりものという夢、あるいは可能性という翼にもう一度賭けなおしてみようではないか。その問いかけは、現代を鋭く批評しながらも、私たちにもっとポジティブな未来を描くことを促しているようだ。

國府理さんが生み落とした作品たちは、手元にある技術を魅力的に統合してできあがった。その腕と眼が導いた効果には、誰にも真似のできない素敵な空気で満たされている。おそらく、そこに人の魂に呼び掛けるものがあるからだろう、いつまでも心を揺さぶり、ときめかせ続けるのは。